

中国の弾道ミサイル早期警戒衛星開発と核反撃政策の転換

漢和防務評論 20170501(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

現在、中国には米国の NMD のような弾道ミサイル早期警戒システムは存在せず、核反撃に関しては、敵の核弾頭が自国に着弾してから残存核ミサイルで反撃する戦術を採ってきました。

しかし近年、弾道ミサイル早期警戒衛星の開発に着手し、10 年以内にシステムとして完成する可能性があるようです。そうなると、敵の弾道ミサイルが着弾する前に味方の弾道ミサイルを敵に向けて発射できるようになります。

中国の核反撃能力が飛躍的に向上すれば、世界の戦略バランスが崩れ、米ロの核軍縮交渉が大きく影響を受けることになると思われます。

KDR 東京平可夫特電：

まず最初に 2013 年 4 月に KDR が掲載した「毎日分析摘要」（英文版）の”中国がミサイル早期警戒衛星システムを建設する”とのニュースを見て欲しい。ニュースの題名は：「中国空軍レーダー学院は弾道ミサイル早期警戒衛星の論証作業を完了した」である。概要は下記の通り：

中国の弾道ミサイル早期警戒衛星開発計画はすでに動き出した。中国空軍の基本的要求は：弾道ミサイル早期警戒システムを、限定された地域の早期警戒システムから、全地球的な早期警戒システムに転換すること。中国の早期警戒探知システム建設にあたっては、限定地域の早期警戒探知ではなく、偵察衛星、早期警戒機及び地上の超視距離フェーズドアレイ・レーダーの開発と配備を加速し、防空と対宇宙早期警戒を一体化し、早期警戒探知任務を全地球規模へと範囲を広げる。

KDR は：”全地球規模の早期警戒任務”とは、第二砲兵（現在のロケット軍）が米国の ICBM（大陸間弾道ミサイル）に対抗するための早期警戒システムを建造することを意味する、と考える。

中国軍の考えは：戦略早期警戒手段を速やかに開発し、全地球規模の早期警戒能力を具備した対宇宙早期警戒システムを構築する。対宇宙早期警戒システムは、国家の対宇宙作戦戦力及び戦略進攻戦力の重要な構成要素であり、宇宙から来襲する弾道ミサイル、衛星及び有人宇宙船を、主として発見、監視、追跡、識別し、戦略防御作戦を実施するためのリアルタイムの宇宙武器動態情報を提供する。

KDR は、中国軍が建設する戦略ミサイル早期警戒衛星の初期段階の論証計画を入手した。この計画の主な内容は：地球同期軌道の早期警戒衛星に 120 度の角

度の範囲を監視させる。そして 3 個の地球同期軌道衛星で全地球をカバーさせる。地球同期軌道衛星の監視範囲で精度が劣る地区に対しては、個別に 1 乃至 2 個の極楕円軌道衛星で補完する。2 種類の軌道の早期警戒衛星の配置を組み合わせ、陸地から打ち上げられた ICBM に対し、約 25 乃至 30 分間の対処時間を確保する。潜水艦発射弾道ミサイル (SLBM) に対する約 10 乃至 20 分間の対処所要時間の要求に対しては、早期警戒監視の空間を広げ、時間を延伸する。

KDR は：この早期警戒衛星を開発する主目的は、米軍が北極軌道及び太平洋軌道経由で中国に向け発射した ICBM を、同時に 2 種類の軌道の早期警戒衛星を利用し警戒監視するためである、と考える。すなわち中国版の”国家ミサイル防御計画”(KDR は CNMD と名付けた)を建設することである。KDR が知り得た内容は：この計画は 3 個の層の迎撃システムで構成される：第 1 層の迎撃システムは大気圏外で、高度 100 乃至 200KM 以上。第 2 層の迎撃システムは大気圏内の高層での迎撃で、高度 60KM 以上。第 3 層の迎撃システムは、大気圏内の低層の迎撃で、高度 20 乃至 30KM である。このことから、中国が開発する弾道ミサイル早期警戒衛星は、主として米国の ICBM に対処するためであり、同時に周辺国家の中距離戦略ミサイルに対処し、”国家ミサイル防御計画”及び”戦区ミサイル防御計画”(KDR は CTMD と名付ける)を一体化した赤外線探知衛星による早期警戒システムであることが分かる。

現在、2017 年 2 月の航天科技集团公司第 8 研究院第 509 研究所が紹介した同所の科技副主任 LU GUOPIN 特集記事を見ると：(断定した結論：中国の弾道ミサイル早期警戒衛星開発はすでに事業化された)

航天科技集团公司第 8 研究院第 509 研究所を紹介した中で、科技委員副主任陸国は弾道ミサイル早期警戒衛星の開発を日頃から提起していた。彼は、静止軌道某型衛星の技術責任者と楕円軌道某衛星開発事業の論証メンバーを兼務していた。彼は、衛星開発全体計画の実行可能性の論証を完成させ、事業立ち上げの基礎を築いた。

KDR の 2013 年の報道と対比すると、結論は明確である：2013 年以降、弾道ミサイル早期警戒衛星開発計画は、すでに技術開発段階に入っていた。このため、重要技術である赤外線センサーの開発事業は加速している。

KDR は多くの情報を収集したので、近々、連載記事を書く予定である。

其の一、KDR が関心があるのは：中国の弾道ミサイル赤外線早期警戒衛星システムが、逐次就役する(最も可能性があるのは 10 年以内)ことによって、中国の”核兵器による先制攻撃はしない”との従来の核反撃政策が転換するかどうか？である。

KDR の判断は次のとおり：如何なる状況下にあっても、”先に核ミサイルの発射ボタンを押すことは絶対にない”との伝統的な核反撃政策に大きな変化はないと思う。しかし、現在、黒龍江、福建、華北地区に建設されつつある大型フェーズド・アレイ早期警戒レーダーが出来上がり、一旦弾道ミサイル早期警戒衛星が打ち上げられると、中国は米国から来襲する ICBM への対処時間が、現在の 10 乃至 15 分から 25 から 30 分に増加する。その目的は、有効な”国家ミ

サイル防御システム”を建設することの他、いかなる構想があるのだろうか？周知のとおり、中国は、一貫して米国の”国家ミサイル防御システム”(NMD)に反対してきた。現在は、”地上発射弾道ミサイル迎撃システム”(GBI)に改称された。

中国は、ミサイル早期警戒衛星を打ち上げると、中国版 CNMD が完成する。そして MIRV 化された多くの ICBM 弾頭、高速滑翔飛行体が米国に向けて配備が完了する。これらを米国に対して如何に説明するのだろうか？したがって世界の核軍縮交渉の方向が大きく変わらざるを得ないと思う。

其二、米ソ（露）の弾道ミサイル早期警戒衛星開発の目的は、核反撃能力の有効性を高めることにあった。25 乃至 30 分以内に、敵の核弾頭が自国本土に到達する前に、味方の ICBM を発射することにあった。しかし現在まで、中国はこのような能力はなく、従来行われた中国ロケット軍の”高級戦役軍団演習”では、米国の ICBM がすでに中国の核基地に打撃を与え、核ミサイルが爆発した後の”事後の核反撃”作戦を想定していた。

しかしすでに弾道ミサイル早期警戒衛星を配備完了した状況下で、引き続き同じ政策を続けることは、サイロに配備された全ての ICBM が依然として敵の先制攻撃を受け破壊され、残存核反撃能力としては、機動配備の DF-41、DF-31A 型 ICBM、JL-2A、JL3 型 SLBM に依存するしかないことを意味する。残存核反撃能力が有効なのは、反撃用 ICBM/SLBM の地下基地入口が破壊されない場合の話である。B-2 戦略爆撃機は、ICBM が配備された地下基地出入口を直ちに爆破する能力がある。

一方、中国の弾道ミサイル早期警戒衛星が配備された後は、一旦、米軍の大規模な ICBM の来襲が探知されると、DF-5A/B 型 ICBM サイロの発射部隊は 25 分の対処時間内に発射することができる。すなわち、米軍の核ミサイルが着地爆発する前に、DF-5 はすでに発射されている。これはソ連の当時の戦略ロケット軍の作戦思想に似ている。もしそうであれば、中国が弾道ミサイル早期警戒衛星を開発する意義は巨大である。

ここでまた別の問題を提起したい。もし中国ロケット軍のコンピューターシステム、弾道ミサイル早期警戒衛星、レーダーに故障が発生した場合、どのように対応するのか？レーガン大統領の時代、米国のミサイル早期警戒システムのコンピューターが故障したことがある。米国は、ソ連が大量の ICBM を米国に向けて発射した、と誤判断した。当時、B-52 戦略爆撃機はすでに電源を入れ離陸準備を完了した。サイロの ICBM 部隊は高度の警戒状態に入った。幸いに、故障回復までの時間が短かった。もし当時、軽率にもソ連に核攻撃を発動していたら、その結果は想像すら恐ろしい。北京は、類似の技術的故障が発生したらどう対処するのか？

中国は、核反撃政策を転換するのか？KDR は観察を続けたい。

以上